



平成三年  
(1991)  
七月十五日発行  
〔年四回発行〕

編集通信

発行人 東明雅  
発行所 柏市つくしが丘2-2-12東明雅方  
Tel. 0471-75-1192

夜店のステッキ

東明雅

夜店は現在も残っているが、ステッキ屋  
というの最近見ることがない。昔は紳士  
と言われる人がいて、ステッキをついたか  
らステッキ屋もあつたが、終戦以後、世間  
から紳士がいなくなるとともに、ステッキ  
屋も影をひそめた。これは自然の理である  
が、世の中が高齢化社会となってゆくにつ  
れて、ステッキ屋も最登場するかも知れな  
い。ともかく、ピカピカに磨き上げられた  
ステッキが何十本も並んでいる状態を想像  
して欲しい。

一方、歌仙は三十六句で成り立っている  
が、その一句一句が、すべて丈高く独創的  
なものばかりが並んでいたら、それこそ、  
ピカピカのステッキが夜店に並んでいる状  
態に似ていないだろうか。芦丈先生はこの  
ような連句は困るとおっしゃるのである。  
何故困るのか。第一、丈高く、独創的な  
句ばかりが、仮りに三十六句並んでいたと  
すれば、読む人はおそらく半ばで巻を閉じ  
るだろう。それは退屈で、「三句の転じ」  
という連句の最も重要な約束を忘れ、変化  
を生命とするこの文芸の特質を無視した結  
果、どうにもならぬ単調極まる作品となり  
果てているだろうからである。

次に、連句というものは、前句を受けて  
不即不離な付句を考える。それが連句の最  
大の文芸性である。それなしに、各句がそ  
れぞれの独自性のみを發揮することになれ  
ば、それは正しく連句の文芸性の前面的否  
定ということになろう。

「よい連歌は仲のよい他人が並んでいる  
ようで、悪い連歌は仲の悪い親戚が並んで  
いるようだ」という連歌の先哲の教えを噛  
みしめてみる必要がある。

Aがもし丈高い独創的な句を出したら、  
BはAの光をいよいよ高めるように配慮す  
べきであり、CはAと同じく丈高い独創的  
な句はわざと避けて作句すべきであろう。  
これが座の文芸と云われる連句の、いわゆ  
る連衆心というもので、個の文学である俳  
句が丈高く独創的なものを競って出すのは  
反対に、自分の句を誇るよりも、作品全  
体の構成、調和を考えるのが先だからであ  
る。

これには実例を挙げるが一番よろしいが  
現在の人の作品を悪い例証とするのは憚り  
がある。たとえば、安永九年、蕪村と几董  
の巻いた「冬木だち」の巻は名作としての  
評が高いが、発句「冬木だち月骨髄に入夜  
かな 几董」、脇「此句老杜が寒き腸 蕪  
村」、第三「五里に一舍かしこき使者を労  
て 同」など、当時としては、丈高く、新  
しく、独自の詠みぶりだったであろうけれ  
ども、その高踏的な漢詩趣味、中国趣味も  
三句続くとすれば鼻についてくる。いささ  
か「夜店のステッキ」になってはいはしない  
だろうか。

「二五四三」について

窪田 薫

拝復

六月十四日付四枚にわたる御手紙有難う  
ございました。私が「連句辞典」をパイプ  
ルの様に偏重するのは、第一に「二五四三」  
を重視し、類書の中で抜群に詳しいからで  
す。見渡した所、俳壇連句壇おしなべて、  
意味とか付味とかは重視する割には、音調、  
舌頭千転することには疎い模様なので、私  
はことさら過剰といへる程に「二五四三」  
を強調したいのです。むしろやり過ぎる位

に……  
「二五」については寛容に、「四三」に  
ついては苛酷にやりたい。これは「連句辞  
典」どほりです。「私たちは25もこんな  
には許さない！」とおっしゃいますが、ホ  
ントですか？ ダとしたらオミゴトです。  
『1990年の獅子料理』の、御指摘の  
九例(二例は私の捌きではありません)中、  
八ページの「雪降る夜更け」は私も不賛成で、  
「雪の降る夜」とでも手入れしたい所です。  
手前味噌ながら「獅子料理」の自慢の一  
つは、手入れした場合、原句も脚注で示し  
捌きの責任を明らかにした事です。批判は  
甘受致しませう。  
一五八頁13句目原句  
日向北ひなたきた向も過ぎたら毒よ  
「毒よ過ぎたら」と加朱した為「とぼけた  
味がうすれて残念」の由ですが、切口上の  
命令調が出て良くなったと思ふがなア。  
二百頁14句目原句  
いくつの出会ひいくつの別れ  
「お出會ひいくつ いくつお別れ」の加  
朱について「おの必然性がない、リズムも  
こわれたのではないか」とのことですが、  
私はさうは思はない、見解感受性の違ひで  
せう。  
二百三頁の「たんまよたんま」は気付い  
ておりましたよ！ 脚注に書いて置きました。  
「式目を守る連句をしたくない、式目  
に負けない連句をしたい！」その意気や壯  
頑張ッテ下サイ！ 私の方は「連句辞典」  
の権威を笠に著して大聲で「二五四三」とわ  
めき散らし、揚足取り役、憎まれ役に徹す  
ることに致します。 早々

平成三年六月二十日

窪田 薫

矢崎 藍 様

※両先生ご了承の上掲載させて頂きました

若尾 よしえ

私が現在住んでいる伊勢原に引越して参りましてちょうど十八年になります。

それ迄住んでいた世田谷区代田の家の隣の奥様、魚屋の順風さん（現在は花屋）、女学校の友人の道子さん、身体障害者の竹風さん（故人）、川口市の小さな町工場で働くシズさん等と、いつも五六人のメンバーで月一回の句会を何よりの楽しみに続けて参りました。

私個人の問題で、ACCの東先生のお教室に入会しましたのが昭和六十一年春。これ以後はまことに私の独断と偏見の叩台でございました。

今になって見ればわかるんですが、「万法に照して自己を習ふ」というそれこそ其の一語に尽きるので。が、其処に行きつくまでの苦しかった事、笑い事ではなく、それはつらいことでした。特に俳句の世界に長かった者にとっては、一直と称し、くるくると直されていく我句に出会う切なさといったものは格別でした。しっかりと式目を身に付けてしまえば何のことないんですが、私はそれでとても足踏み致しました。長いこと、お友達にもその心を伝え得られなかつたもどかしさがございました。しかし鬼に角「やらねば」と努力して参りました。伊勢原に来ましてから初めての友人、キヨ子さん（校長先生の奥様）、梨園の玲子さん、八十才に近いはずい様と私の四人で、蕙がわりのシートをひろげて芝草会を始めましたのが三年前。連句入門書を読み合せ等しまして、そろそろ始め出しました頃、猫糞会の裾野が広げられるという話、一待ってました」とばかり飛乗り、嬉しくてたまらぬ時、竹風氏とかずい様を失い、

キヨ子さんはくも膜下出血の大病で、おまけに玲子さんの御主人様が伊勢原市議選に立候補され、ピンチに立たされました時、不思議ですね、日頃真龍庵で御一緒の友人お二人が芝草会にお出下され、奇しくも続けることが出来ました。

脇起り二十韻「葱白く」の巻

若尾 よしえ 捌

葱白く洗ひたてたる寒さかな 翁  
菫を吊せる門の風除け よしえ  
兄弟仲よきことを褒められて シズ  
球投げ遊び賑ひてをり（故）かずい  
学校の屋根根からのぼる望の月（故）竹風  
芋の煮つけを鍋にいっぱい 順風  
縁組のお役目果たし新酒汲む 道子  
お笑ひコンビちびとのっぼと シ  
フーテンの寅さんの旅まねしたく 竹  
舞ひ戻り来る境内の鳩 竹  
湯上りに見る夏の半月 順  
これ以上待たせないでと石を蹴る 道  
手に取り合ひつ三味を爪びく か  
次々と名前出てくるリクルート 順  
親の名で売る政治芸能 竹  
ころころと太りしパンダすこやかに シ  
クレヨン絵がとて可愛く か  
輪になって花の下にて「よおいやさ」よ シ  
連風掲げる浜の若者

起首 昭和六十三年十月二三日  
若尾 十二月四日

戦々の記

川木 佐栄子

昨年まで、勤労学生というものをやっていた。数年前突然会社をやめて舞い戻った母校は暖かく迎えてくれたが、三年前と少しも変わらぬ学生気分でした私も、立派になった図書館や教室に「一々感動していたら、今浦島」の渾名を頂戴した。その時から日本語教師をしている今に至るまで、読む本は殆ど文法関係ばかりだったように思う。たしかに勉強をしていくと、ことばとは実に面白いものだ、ということが分ってくるが、「月がきれいだ。」と「月はきれいだ。」の違い、などということばかり考えている内に、偶には月を愛でる高度な語彙を発したいものだと思われてきた。だから連句を、というのも飛躍があり過ぎるというものだけれど、「連句入門」という講座名に、そっかしい私は入門初心の方ばかりだと思ひ込んでしまったのである。俳句も何も勉強したことがなくて、いきなり入れて頂くのは厚かましい限りであった。先輩の方々の語彙の豊かさや、発想の広がりやの自由さに感嘆する一方、自分の頭の固さに改めて気付かされてガク然としたりしている。

尤も、教室のある日は、職場の一つである25階から昼食抜きで駆けつけるので、一時的に脳細胞が栄養不足の状態なのだ、と自らに言い訳している。

峯田 政志

友人に連句を教わって以来、複数で創作を行なうことの意外な面白さに惹かれました。何度か実作訓練で悩まされたり、連句会の見学を重ねるうち、猫糞発祥の場と伺っているACC教室を、一度は受講してみたいと思うようになりました。

イメージでは、初心者が殆どで、連句入門をテキストに基礎からの講義をのんびり受けるのだろうと思っていました。が、しゃべりながら付句を求められ、驚きました。メンバーも、ベテランの先生方が多く、萎縮しておりましたが、回を重ねる毎に少しずつ落着いてきました。しかし、周囲の話し声が聞こえるようになって再び驚く。その言語感覚の緻密さ、指摘の手厳しさ。

特に延ばす句法の説明や、一語一句の語感の違い、髭とまつ毛の障りの話など、本講座のレベルの高さに印象づけられました。実作では三十前後に及ぶ「付」に、個性と、感覚の多様さが楽しく、何か頭の柔軟体操をしているようで、ここが醍醐味なのだ、などと思いました。五句目で選もれですが「ミュージカルはねて濠洲仰ぐ月」は、私も帝劇でレ・ミゼラブル見たあと実感で解りました。連句も形式は違ってもミュージカルに根底で芸術として通ずるものがあるように思いました。

七句目でやはり選もれですが、「爪だけの鬼女が捕へり薄紅葉」の句、最初判らなかつたのですが、三橋麗女を想い出し、凄句を作る方がいると印象に残りました。練達の先輩方の中で新人を訓練していくパターンが良く解りました。先輩方の才気に怯みながらも、何とかついて行きたいと思っている此頃であります。

内田 麻子

房連庵では、毎月第四木曜日に例会を持つことになっているのですが、割に古くからの歌友五味蓉子さんが連衆のとりまとめをして下さる仮称月曜会も、出来てもう四年になります。

五月の座は、先月のお花見の企画が雨で流れてしまったので、一度伺ったことのある相模湖近くの塚本泰子さんのお宅ですることになり、当日は一同早目に高尾駅集合、揃って相模湖に向いました。

近くにいっても船に乗るのは久しぶりと云う泰子さんの案内で、鯨の形の遊覧船に乗り、湖の一周をする。

殆ど貸切の船の船から、突然鯨の潮吹きがあつて驚かされながら、緑の風に吹かれ結構入り組んだあたりをゆっくりと廻つて後、湖畔でランチをとり、塚本邸に入る。

国道沿の旧家を取りこわさないで、近代的に改築されたと言う塚本家は、ほんとにする様な落着いた雰囲気です。発句は皆で出し合つて、今回は珍しく麻子の句とする。

湖の風も届くや桐の花  
湖をめぐる緑の中に、丈高い桐の木が紫色の花をけぶらせていた風景。脇の蓉子さんが老鷹の鳴き声を添える。

恋のあたりになると皆から期待の声があるのです。五句目、月の座の瀬木さんも歌人。有力歌誌の編集にも携わっておられるこの道のベテランです。

入替も少しあつて来られなくなった方は残念でしたが、こんなメンバーで、まことになごやかに、ゆったりと二十韻をまいておられます。時々合同の興行もして、尚この雰囲気が続けたいという連衆です。

二十韻 「湖の風」 内田麻子 捌

湖の風も届くや桐の花

高きあたりに鳴ける老鷹

土産物選ぶ楽しさ旅に来て

水出し珈琲こくのある味

手紙書く父の窓辺に七日月

マザコンファザコン青き野葡萄

女子寮は男引き入れ霧かくす

尤もらしく書くが小説

平和です一面トップ貴花田

犬も飽食医者通ひする

奥の院登りつめたる岩煙草

どこでも見える超高層は

のびやかに絵を描く夫婦ベレー帽

夢二多感な恋の通歴

おでん酒湯気立つ屋台照らす月

枯木の影にはとと驚く

半世紀過ぎサハリンの土を踏む

春の夕べに舟歌をきき

花簾り老いも若きも美しく

ひっそりと在る庭のふらここ

【新刊案内】

式田 和子

連句を「文人連句」と「生活者連句」と分けて鑑賞できると考えれば、近刊三著はまさに「生活者連句」で、人の生きてくる息吹が連句を通じフツフツと伝わって来る。

◎「1990年の獅子料理」窪田薫著

(俳諧寺芭蕉舎) (同舎刊) 丸0111  
631-4009 五千七百五十七円

窪田薫先生は北海道在住。しかし文音連句は日本(外国も)中を駆け巡り、まさに人馬空を行く。ダイナミックなパワーとスピードは連衆を巻き込んで、それこそ万巻を巻かれ、既に十六冊も出版されておられる。この連句集は「極私的俳諧年鑑」と傍題をつけておられるが、北海道の民衆俳諧を掘り起こして紹介され、更に各社連句人の論文を幅広く掲載されておられる懐の深さには脱帽。活気溢れる圧倒的句集。

◎「房連庵の連句」内田麻子著(猫蓑)  
(むなぐるま草紙社刊) 丸044  
855-13029 二千円(送料共)

内田麻子さんが父上ゆかりの房連庵において巻かれた歌仙・二十韻・短歌などを集められたもの、酒恋・世吉もあり、常に新しいことに挑戦されておられる姿勢に著者の軌跡を読みとれる好著。

◎連句「卯の花」佛測健悟編(猫蓑)  
丸0424-88-15484

若い男性ばかり集って連句するという魅力溢れる会の記録。働き盛りの社会人らしい視野と発想と感覚の句集。

◇猫蓑発展基金ご協力感謝いたします。

- 一口 町田順風 工藤千枝子 稲葉道子
- 内島啓子 藤井初江 小野シズ
- 茂田キヨ子 成田玲子 川澄みよ
- 秋元まつ子 老田喜美 若尾よしえ
- 雑賀遊
- 二口 原田千町 市野沢弘子 (敬省略)

◇猫蓑発展基金は随時受け付けておりますのでよろしくお願ひ申し上げます。

振替口座 東京31550348 猫蓑同人会

\*連句ときかな\*

鱧(はも) 杉江 杉事

梅雨を吸って鱧は一段と美味になるといふ。祇園祭の頃の鱧の味は最高で、京都人は祇園祭を鱧祭とも呼んでいる。

二条通にある堺萬を筆者が訪れたのは二十年程前のことである。当時は仕出しが専門で、座敷は二階に二間だけ。鱧の濃厚な味を淡白に仕上げた先付の小袖寿司に始まり、煮物はくずたなき、焼き物は照り焼き、酢の物は鱧皮きゅうり、お目当ては梅肉でいたたく鱧落としと鱧尽しの京の夏の味を満喫した次第。

〔Q〕 一巻の中で、人情の句と、人情無し  
の句、又、春夏秋冬の季の句の割合は、  
それぞれ何%位が適当でしょうか。お教え  
下さい。(加藤治子「ころも連句会」)

〔A〕 連句のおもしろさは人情の機微、  
人生の哀歎をうたうのが中心ですから、た  
とえば、二十韻二十句の中で、すくなくとも  
半分以上は、人情の句であってしかるべき  
でしょう。実際、作品にあたってみますと、  
「新炭俵」所収の二十韻二十四巻中、  
人情の句は、最多十六句、最小十三句で、  
十四句が十巻、十五句が九巻、平均してみ  
ると一巻に十四・五句ということになりま  
す。ということば、ほぼ人情句三句あるい  
は四句に対して、人情無し(場)の句一句  
という割合で、大体これが一応の目安とな  
るでしょう。人情無し(場)の句は、場面  
の転換や、気分を一新する時などに、非常  
に有効ですから、活用していただきたいと  
思います。

歌仙では、「猿蓑」の四歌仙の人情の句  
の平均は二十四句強です。それに対し、  
「新炭俵」では「風の二月」が二十四句、  
「落葉掻く」は二十八句で、大分、ばらつ  
きがありますが、作品は生きていますので、  
二十八句は多い、二十四句は少いとは一概  
に言えません。歌仙で二十四句は、二十韻  
ではほぼ十三句にあたり、この位が限界と  
も思われますが、たとえば「猿蓑」の「灰  
汁桶の」の巻など、人情の句は二十二句で  
すが、これで結構な一巻になっております。  
次に、一巻の中での、季句と無季(雑)  
の句の割合ですが、まず、二十韻は二十句  
の中に春・夏・秋・冬、四季を全部入れな  
ければなりません。その数までは規定し  
てありません。春三句、夏二句、秋三句、

冬二句として、十句を季句とするのがまあ  
一応の標準でしょう。しかし、時によって、  
発句が春の場合、句の花のあたりにまた春  
が出ると、春季が五句になり、夏・冬の句  
を一句で捨てるようなことも自由なので、  
はっきり何句と限定することはできません。

「新炭俵」の二十韻でも、季句の数は最  
多十二句(春五・夏二・冬二・秋三)、最  
少九句(春三・秋三・夏一・春二)で、大  
体は十句か十一句です。尤も、この九句と  
いう作品は花前が雑になっていて、この点  
ちょっと異例ですが、代わりに冬が二回出  
て計三句になっているのです。だから、最  
小は理論的には春三・夏一・秋三・冬一の  
八句でしょう。

俳諧人物伝 ④

丸山 梅因

杉内 徒可

「歌会始めに相当する宮中の句会始めの  
儀の実現を依頼した俳人の一人に、私の知  
り合いで先年物故した丸山梅因翁がいる。  
おそらく同人らの奔走によるものだろう、  
大野伴睦氏を代表とする句会始め(あるい  
は詠進歌だったか)期成運動(?)の趣意  
書といった印刷物をもらったこともある。  
だが両氏とも故人となって、その運動がそ  
の後どうなったかは聞いていない。」  
(尾形仿著「俳句の周辺」―百合と睡蓮)

右の一節を読んで思い出した事がある。

私が狭山市に梅因氏を昭和四十六年三月  
お訪ねしたのは、秋の俳諧時雨忌に一人で  
も多くの参加者を得たいためだった。七十  
八才とは見えぬがちりした風貌の御人だ  
ったが、血圧が高く外出が出来ないと嘆か  
れ、貴方にこれを貰って頂きませうと「天  
皇詠進俳句会」趣意書を渡され、  
「宮中に参じて詠進の俳句会を開くのはい  
まだに実現してないのが残念です。連句始  
めの式も考へるべきですね」と呟かれた。  
この趣意書の役員の方には左のよ  
うに書かれている。

名譽總裁 三笠宮崇仁

總裁 大野伴睦

会長 小宮豊隆

副会長 飯田蛇笏

詠進俳句集の方はこれが功を奏してか、  
第一集、第二集、第三集が四十三年から毎  
年刊行されている事実を後日知った。

梅因は信州小諸市出身、東京商大を卒て  
王子製紙入社、後東京電力に轉じている。

俳句は内藤鳴雪の手ほどきをうけ、山口  
青邨の鞭を三十年うけたという。  
連句は昭和初年に春秋庵十一世三森準一  
に入門。春秋庵編「連句の実際指導」には  
文台捌の写真が十四回掲載されているが、  
その三役は次のようになっていて、から忽ち  
頭角をあらわしたに違いない。

宗匠 保雄 脇宗匠 梅因 執筆 準一  
十年二月準一より「俳諧明倫」を継承し  
て「俳諧春秋」と改題して刊行していたが、  
戦時中の用紙規制に依り休刊、そのまま復  
刊できなかつたという。

「俳諧明倫」は明治七年三森幹雄が創立  
した明倫講社より同十三年二月創刊された  
由緒ある月刊俳誌である。

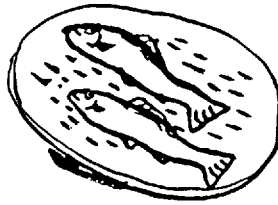
編集部より

○ このところの連句作品には、雲仙噴火  
に取材した付句をよく見かけます。

「島原大変」のショックは色々な方面に  
尾を引いておりますが、被災地の方々は本  
当におつらいことでしょう。

○ 「ねこみの」表紙の、猫がくわえてい  
る花は毎号違っているのですが、こんな虫  
メガネの世界、お気づきにはなりませんよ  
ね。今回は木槿。一日花の筆頭です。  
サ、早クオ付ケナサイ、とても言っている  
ようです。

○ 玉稿お寄せ頂きました方々にはまことに  
有難うございました。



募集

「猫蓑作品集Ⅱ」掲載の作品を募集  
いたします

△ 二十韻又は歌仙一篇(捌一名に  
つき)平成二年11月/平成三年  
10月迄の作品

△ 締切日 十月末日

△ 発行予定 平成四年四月

担当 下鉢 清子

TEL 0427-727549

季刊「ねこみの」通信 第四号  
発行者 猫蓑連句会  
印刷所 アトリエ・ネコ